九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Agencyについて ： バトラーのagency概念を中心に

森山, 達矢
九州大学大学院比較社会文化学府

https://doi.org/10.15017/4494476

出版情報：比較社会文化研究. 7, pp.11-20, 2000-03. 九州大学大学院比較社会文化研究科
バージョン：
権利関係：

『比較社会文化研究』第7号（2000）11～20頁
Social and Cultural Studies
No.7（2000），pp.11～20

Agencyについて

― バトラーのagency概念を中心に ―

森　山　達　矢

1．はじめに

本稿では agency[(1)(2)]概念を再検討する。Agency 概念は，近年注目されている概念である。行為（act）を理解することは，社会学の歴史の中で最重要の課題であった。行為を理解する方法は主に二つの流れがある。一方は，デュルケーム，パーソンズを筆頭とする客観主義的な行為理解の方法と，もう一方はヴェーバー，シュッツを筆頭とする主観主義的な行為理解の方法である。しかし前者は還元主義的であるとか，後者は行為における社会的な要素を排除しているといって批判されてきた。こうした理論的な袋小路を抜け出るために，例えばブルデューは「ハビトゥス」「プラチック」という概念を用いて，行為を説明する上で全面的に構造にも行為者の意志にも還元できない領域を描き出そうとした。またギデンズは，行為者の社会構造を再生産する能力に注目し，構造の概念を「構造化し構造化される構造」と読み替えることによって，主観主義と客観主義を乗り越えようとする。そこでは agency（agent）概念は重要なキータームになっている。

本稿ではこうしたことを念頭に置きつつ，ジュディス・バトラー（Judith Butler）の agency 概念を中心に論をすすめる。その際（1）行為理解に関して，つまり行為と構造の関係をいかに捉えるのかということと，次に（2）ラディカル・デモクラシーとを絡めながら議論を進める。(2)について言及するのは，バトラーの議論が理論と実践の問題を考えるにあたり重要な論点を含んでいるからである。

2．バトラーとは誰か？

危険を承知でバトラーの主張を極度に単純化してしまうならば，「反本質主義的フェミニズム」となるだろう。

バトラーはその著書『ジェンダー・トラブル』で，フェミニズムに衝撃的な一撃を加えることになった。なぜなら，フェミニズム運動の主体である「女性」という一見自然に見える存在も，社会的，文化的に作られたものであるということを明らかにしたからだ。つまり運動主体である「女性」というカテゴリーを解体してしまったのだ。

バトラーの主張が従来のフェミニズムの主張と徹底的に違うのは，フェミニズムという運動の主体を「女性である」ことに求めないことである。すなわち「女性」というアイデンティティをフェミニズムの政治の基礎に据えないということである。これまでのフェミニズムが当たり前のように使ってきた「セックス」と「ジェンダー」という二項対立的な思考，こうした思考枠組みさえ，ジェンダーという文化的構築装置の作用として生まれるのだとバトラーはいう。これまであたりまえの事実として受け入れられていたもの，例えば，ジェンダーやセクシュアリティ，そしてこの二項対立は，実は基盤として社会的に構築された虚構に過ぎないということである。こうした主張は，これまでのフェミニズムの議論と変わりないと思うかもしれない。これまでのフェミニズムの議論は，「セックス」と「ジェンダー」という対立図式を持ち出し，生物学的な性と社会的な性役割の結びつきが必然的でないことを明らかにしてきた。しかし，バトラーにとって，こうした議論は受け入れられない。なぜなら，こうした議論は先の対立図を再生産させることだけに陥ってしまうからだ。ジェンダーの人為性を主張すること，これは「真性」のジェンダーを呼び込んでしまう。これは二項対立の枠内にいることになってしまう。問題なのは，この議論が人間には何かしらの本質があることを前提にしてしまっているということなのだ。バトラーによれば，前-言説的な「セックス」は存在しない。フェミニズムが基礎にしている生物学的性差ですら，バトラーにとっては本質的なものではないのである。そういった性差は，管理される身体を生み出す規制的実践として機能しているというのだ。つまり，一つの権力の装置として機能しているのである。彼女が問題とすることはこうだ。人間には本質的なものは何一つとしてないのにも関わらず，セックス，ジェンダー，欲望といったものが本質化されてしまうのはいったいなぜか。彼女は問う。「女性」であることがいかに本質化されるのか？　「セックス」（という規範）がいかに物質化（materialize）されてしまうのか？　彼女の論点はこのことに尽きる。

3．パフォーマティヴィティ

繰り返すが彼女の問いは，「女性」であることがいかに本質化されてしまうのかということ，そして「セックス」がいかに物質化されてしまうのかということだった。このことを説明するためにバトラーはパフォーマティヴィティ（performativity）という概念を用いる。

ジェンダー・アイデンティティについてバトラーはこう説明する。「ジェンダー」「セックス」といった現象がごく普通なものとしてわれわれの目に映るのは，文化的な実践，文化的・社会的な規制（言語の使用），その反復があるからだ。そこには本質的なジェンダー・アイデンティティ／セクシュアル・アイデンティティは存在しない。あるのは，セックス，ジェンダーなどが本質化され，自然化されるような「実践」なのである。そのような実践をバトラーは「パフォーマティヴィティ」と呼ぶ。「パフォーマティヴィティは，存在論的な効果が設定されていくときの，言説のモード」なのである。つまりパフォーマティヴィティとは，「セックス」「ジェンダー」といって名付けられたものが，それが本当に自然なものとして受け入れさせるようにする手段なのである。

バトラーは，ジェンダーをパフォーマティヴ（行為遂行的）なものとして捉える。それは，ジェンダーは実体を持たないのだけれども，社会的・文化的実践の効果として，パフォーマティヴィティの効果として存在するということである。パフォーマティヴィティがジェンダーの存在論を可能にするのだ。しかし，パフォーマティヴィティを単なるパフォーマンスと勘違いしてはならない。パフォーマンスとは，ある意志を持った個人がジェンダーを選択して，そのジェンダーの規範にしたがって振舞っているということであり，それは規範に先立つ主体やアイデンティティを想定してしまっている。ジェンダーは衣服のように着たり脱いだり出来るものではない。パフォーマティヴィティという概念はそういった主体という概念に異議を唱えるのである。

言説に先立つ主体は存在しない。それでは，そういった主体抜きの遂行的行為（パフォーマティヴ・アクト）が成功するのは，いったいどういった条件のもとでなされるのであろうか。つまりどのような条件のもとで，ある生物学的な「女」が「女性」であることとどう結び付けられてしまうのだろうか。そこでバトラーは，言語行為論を参考にしながら，この議論を進める。

バトラーによれば，発話行為が機能するのは，慣習（convention）を引用する事によってのみである。たとえば，「結婚します」という発話行為は，その発話がなされるとき適当な条件を満たさなければ，完了しない。発話が人を拘束する力を持つのは，発話した人の意志や意図ではない[3]。そうした意図を持って「結婚します」と発話しても，相手がいなければ意味をなさない（ゆえに，発話内力は発話者の意図に還元できない）。また「結婚する」という行為は，適当な文脈（適当な場所に新郎と新婦がいて，その結婚を認める適当な権威者）がないと意味をなさないのである。発話行為を遂行するためには，妥当なものとするためには，慣習を引用するほかないのである。

同様に「ジェンダー」や「女性」であることが本質化されてしまうのは，慣習や規範の「引用」，構造の「反復」があるからなのだ。たとえば，女性らしさ（femininity）は，女性の服を着るとか女性のように話すとかいったように「選択によって生み出されるものではなく，規範を強制的に引用させることによって生み出されたものである。」「そしてそれらが持つ複雑な歴史性は規律，規制，処罰という関係から不可分なのである。実際に，ジェンダー規範を身に付ける「人間」は存在しない。反対に，一人の「人間」として承認し，一人の「人間」として生きることを可能にするためには，こうしたジェンダー規範の引用が必要なのである。そこにおいては，主体の形成は，それに先立つジェンダー規範の正統化作用に依存しているのである。」（Butler:1993:232）つまりバトラーが言いたいのは，言説の前に主体は存在しておらず，象徴的な秩序の中に参加することができて始めて，主体となるということである。主体が先に存在するのではない。慣習を引用する中でのみ主体は現れるのである。そして慣習を引用することによってのみ，女性は女性として本質化されていくのである。そして，先に述べたセックスの「物質化」ということは，このような引用の一つの作用なのである。

パフォーマティヴィティとは，慣習や規範の引用のことであり，それによる規範の物質化の過程である。その慣習や規範の中には，この慣習や規範はこのように行われたのだという歴史性が組み込まれている。この歴史性ゆえに，パフォーマティヴィティは社会的に意味あるものとなる。しかしパフォーマティヴィティは，名付けたものを生産する機能だけを持っているのではない。名付けられたものの意味を再定義するという機能をも併せ持っている。これはバトラーにとって重要な意味を持つ。バトラーが，パフォーマティヴィティという概念に訴える意図は，規範がいかに物質化されるのかということ以上に，意味の再定義が政治的なディスコースでどのように機能するのかということに重点がある。その意味において agency 概念が重要になってくるのである。

4．構造と Agency

バトラーは，フェミニストの理論家である[4]。フェミ

ニストとして現実の社会に介入する。そうしたことがバトラーの理論構築に反映されている。

例えば「構造」というわれわれにとって馴染み深い概念に対して，非常にラディカルな考えを持っている。バトラーは「構造」という概念をスタティックに捉えようとしない。「構造」は常に動き，ズレていくと主張する。それゆえにバトラーは，構造の概念をブルデューのそれより，デリダのそれを重要視する。

バトラーによれば，ブルデューとデリダの違いは，オースティンの言語行為論に対する評価の仕方に決定的に現れているという。その違いとは，パフォーマティヴィティに対する評価に関して決定的なのである。それは「構造」をどう捉えるかということに直結している。ブルデューが見逃しデリダが視野に捕らえているもの，それは，パフォーマティヴィティの可変性（transformability）であり，そして発話行為は完全に制御できるものではなく，常に発話者の意図を超えてしまうということである。つまり，「ブルデューは，社会組織をスタティックに捉えてしまったために，社会変容の可能性を制御する反復可能性のロジックを捉え損ねているのである。」（Butler:1997:147）

ブルデューは，オースティンの言語行為論を次のように評価する。遂行的行為が成功するか失敗するかは，発話者が社会的権力を持っているか持っていないかということに関係する。正統的な権力（権威）を持っていれば，その行為を完了させることができ，そうでないならば，効果を生み出さないということである。ブルデューは，発話内行為が成功するのは，その発話に内在している力そのもののせいではなく，それを発話した者がそれを遂行させるための社会的に適当なポジションを占めている限りにおいてであるとする。また，ブルデューは，オースティンの言語行為における「慣習」の考えを「儀礼」的な意味で理解しようとする。そして，時間の問題を捨象してしまう。ブルデューは，言語の力の源を言語そのものには無く，その言葉が力を持つのは社会的な「儀礼」があるからであると言い，そして儀礼を社会的場における市場内の闘争の問題と位置付けてしまう。

しかし，バトラーは問う。権威を持っている者とそうでない者を見分けることが果たして可能なのかと。そして両者の境界が変容させる契機，権威の正統性を変化させる契機があるのだろうかと。それがどういったプロセスを経て変化するのかということを説明できるのかと。

そうした変化のプロセスを捉まえることができるのはデリダの「反復可能性」の概念である。繰り返すが，バトラーによれば，遂行的させる力（performative force）は，慣習的な形式の繰り返しから生まれるものなのである。そういった点において，バトラーはデリダに依拠する。

デリダがオースティンの中に見るものは，パフォーマティヴィティの反復可能性である。デリダによれば，約束や要求といった遂行的発言が効力を持つのは，それが約束や要求の意図によって裏打ちされているからではなく，反復可能な言語形式を通して遂行されるからだという。デリダは，「署名」という事例を取り上げる。「署名」という制度は，記入者の意図を保証するのではない。むしろそれらを切り離す。というのは，記入者の意図がどうであろうと記入してしまえば効力を持つし，また個別の記入者の意図によって署名する仕方が変化するというわけでもない。署名の効力は，記入者の意図にかかわらず，その同一性を模倣し，反復できるという「形式性」に由来するのである（Derrida: 1988）。また遂行させる力は，その脱文脈化する力，つまり先にあるコンテクストを打ち破る力，新しいコンテクストを引き受ける能力から生まれるのである。デリダはコンテクストを所与の統一体とは見なさない。それは止むことなく作り替えられることに開かれているのである。デリダが言いたいのは，「約束する」という言語行為を例に挙げれば，この遂行的行為が完了するのは，約束という行為の「形式」が反復されるためであり，この「形式」を反復するときには，必ず失敗が付きまとっているのであり（約束は反故にされるかもしれない），しかしこの失敗の可能性が，その行為の達成を条件付けているものであり，また別の約束の「形式」へと開かれているというのである。

バトラーは，デリダの構造分析を評して言う。「構造は，その構造性を繰り返すことによってのみ，構造となるのです。反復は，構造が固定するための手段なのです。しかし同時にそれは，構造が脱線してしまう可能性を含み持つものです。」（Butler:1994＝1996:56）バトラーは，社会構造という概念を静的なものとして捉えていない。社会構造の概念に時間軸を挿入するのである[5]。社会構造は繰り返され，反復され，説明しなおされるものなのだ。そしてバトラーは決定的なことを言い放つ。社会構造は，こうしたことによって「破壊されるのではないか」と[6]。

それでは，バトラーがこうした主張をする意味は何なのだろうか。しかしそのことを述べる前に，脱線を引き起こす反復の在り方はどういったものなのかということを論じておく。それは，発話行為と身体性の問題と関係している。

バトラーは，ブルデューのハビトゥス概念がパフォーマティヴィティと関連づけられていないという。前節でパフォーマティヴィティは，名付けたものを生産する機能を持っているということを述べた。バトラーが問題としているのはまさにこのことであった。だから，ブルデューが，身体の社会的な構成を言語とは別の次元の問題として考えていること，言語（使用）の問題と身体性（ハビトゥス）の問題とを切り離して考えていることに対して，バトラーは非常

に批判的なのである。ハビトゥスは，諸階級の半無意識的に身体化された性向であり行動体系である。それは各階級内における象徴闘争の結果でもあり，社会的に構築されたものである。しかし，バトラーにとって，社会的に構築されるということと言語的に構築されるということは明確に区別され得ることではない。「身体の社会的な原動力となるものは，言語的であると同時に生産的である呼びかけによって生み出されるのである。」「呼びかけ」は常に行われており，この「呼びかけ」は身体を作り上げる。バトラーはこの「呼びかけ」をパフォーマティヴィティとして捉える。身体を持つ主体の構築をパフォーマティヴィティで説明する。「遂行的行為としての呼びかけは，主体の社会的構築と密接に結びついた主体を言説的に構築する」のである。(Butler:1997:152-153)

ブルデューは，身体は社会的に作られていると言う。しかし，ブルデューが見逃している点は，身体が構築されるとき，それは常にリスクに満ちた過程だということである。つまり，身体を言説的にかつ社会的に編成しそれを（再）生産する規制が非常に偶有的であるということなのだ。そうと言えるのは，身体が発話の全てをコントロールすることはできないということを考えれば理解できる。ショシャナ・フェルマンよれば（Felman:1983＝1991），発話行為は発話する身体の行為にも関わらず，自分が何をしているのかについて，ある部分について分かっていないため，それが意図していないことを語ってしまうのである。発話行為は，語っている以上のことを伝えてしまうこともある。発話行為は身体行為であること，そして身体は発話の意図を越えてしまうことがあるということ，このことをブルデューは見逃しているというのだ。

この身体がコントロールし得ない領域において，agencyの問題が賭けられているのである。先にバトラーの構造概念について確認した。バトラーの構造とは，反復されるものであり，そして脱線する可能性をも内在させているものであった。ここで問題となっていることは，反復するとき常にズレていく可能性（ときには破壊されること）があるということである。そのズレを呼び起こす可能性は，反復と反復との間の時間差であり，身体のコントロールできない部分にあるのだ。

われわれが社会の中に存在しているとき，われわれは常に呼びかけられている。バトラーによれば，この「呼びかけ」は主体の構築と不可分である。「呼びかけ」はパフォーマティヴィティ（遂行的行為）であった。そして確認したことだが，このパフォーマティヴィティはリスクを伴っているのだった。非常に偶有的なプロセスであった。バトラーによれば，そうした偶有性が顕れてしまうのは身体においてである。そしてデリダによれば，こうした偶有性（失敗可能性）が，この行為自体を条件づけているものであった。バトラーが注目するのは，この点である。この偶有性をいかに社会的に現実的なものへと還流させるのかということ，今ある構造をどのように変化させるのか，こうしたことを徹底的に考え抜くことにおいて，バトラーはフェミニスト理論家なのである。社会に対して介入する地点において，先に述べておいた意味を再定義する機能としてのパフォーマティヴィティの意義，agency の理論がようやく理解できるのである。

遂行的行為の担い手は，発話者ではなかった。それは発話者の意図に還元することが出来ない，形式の反復であった。パフォーマティヴィティはヴォランタリズム，主体を否定する。しかしそれは絶対的主体の否定であって，agencyの否定ではない。逆にこのようにヴォランタリーな主体を否定することが，agency という主体に代わる概念を生み出すのだ。主体を消してしまった後，意味を再定義する担い手はいったい何であろうか？　それこそが agency なのである。しかしそうだからといって勘違いしてはいけない。Agency は，権力から無垢なものでもないし，権力から全く自由なものでもない。Agency はすでに，言語によって作られているのである。

バトラーはこのようなagencyの可能性を語る理論を「言語の agency 理論」という。それは，発話は完全に制御できないものであり，そうした制御できない発話と発話されるものが反復されるとき，そのうちにある時間差によって，その言葉が，発された当初の文脈でなく新しい文脈に位置付け直される可能性を語る理論である。つまりそれは言葉の新たな意味付けの可能性を語る理論のことである。

バトラーの行為理解についてひとまず総括してみよう。特徴的なのは，バトラーは行為をパフォーマティブ(7)として捉えていることである。そこにおいては，行為は行為者の意図には還元されない。バトラーは，主意主義的なモチーフを否定する。そこにあるのは，「慣習」「規範」が「引用」され，「反復」される状況なのである。このことは構造の概念と関係している。構造とは「反復」されることで構造となる。しかしこの構造はスタッティクなものではない。偶有性に満ちたものなのである。脱線する可能性を常に秘めているのである。そしてその偶有性を垣間見せてくれるものがagencyなのだ。

ここまで，バトラーのいくつかの主要な著作から，重要概念である「パフォーマティヴィティ」「agency」，社会構造に対するモチーフを見てきた。そこで理解できるのは，『ジェンダー・トラブル』から『触発する言葉』までの著作において，「ジェンダー」「セクシュアリティ」「身体」「強制的異性愛」「クイア」「差別発言」とさまざまに話題を変

えながらも，そこに底通しているものは，社会的現実に対してどのように介入していくのか，どうすれば今ある社会構造を変えることができるのかということである。繰り返すがそういった意味でバトラーはフェミニストなのである。

先にバトラーは「女性」というカテゴリーを解体してしまったと述べた。このことがフェミニズムに与えた影響はかなり大きい。なぜならそれはフェミニズムという運動それ自体のアイデンティティにかかわっているからだ。これまでフェミニズムの担い手は「女性」であることが当たり前のことだった。運動の担い手であった「女性」ということも一つの虚構だとするならば，「主体」なしのフェミニズムは成り立つのか，「主体」なしでフェミニズムが社会へと介入する契機はあるのか，またそうであるならどういった可能性があるのか。

パフォーマティヴィティも agency もこうした事態に直面して導き出された概念である。「主体」を亡き者としたあとに，社会へと介入する可能性を論じること。バトラーが追求するのはこのことに他ならない。

5．ラディカル・デモクラシー

フェミニズムのプロジェクトとは何であろうか。フェミニズムといってもそれが一枚岩的なものではない，ということは既に明らかだ。フェミニズムは，その誕生から今日までに，その主義・主張の差異によって，四分五裂に分派してきた。近代の理念に依拠するリベラルなもの，マルクス主義に依拠するもの，ポスト・モダニズムに依拠するもの，等々に分裂し，またそれぞれの間で論争が起きている。しかし，フェミニズムのなかでこのように様々な学派が群雄割拠している状況にも関わらず，それぞれの学派を越えて一つのテーマを見つけることができる。それは，フェミニズムは，「ある特定の知識や倫理を確立し，近代社会の内側からその制度を変革する」（土場 :1999:210）という実践ということである。このことを念頭に置いて，バトラーの主張をもう一度考えてみよう。ここでは，近代的な理念である「民主主義」というものと一緒に考えてみよう。そう考えるのは，民主主義というものを根底から問い直した新しい社会運動等の様々な市民運動が持つある種行き詰まった状況に対して，何かしらのヒントを提示しているかもしれないからである。ここでは，シャンタル・ムフのラディカル・デモクラシー論を参考にして，バトラーの議論を検討していきたい。

ラクラウとムフがその著書『ポストマルクス主義と政治』において展開した議論は，政治的な闘争の場面をどこに求め得るのかということだった。ラクラウ・ムフによれば，まさしくそれは主体のアイデンティティであり，社会における主体位置（subject position）である。「女性」であること，「黒人」であること，「労働者」であること，そうしたことがまさに問題として浮上するというのである。主体は，先天的に備わった能力ではないし，固定的なものでもない。それは社会における様々な関係が複雑に交差するポイントであり，流動的なものだ。

ラクラウ・ムフはそれまでの社会観に対して異議を唱える。それまでの社会観というものが社会を実体的に捉えていると批判する。ラクラウ・ムフによれば，「社会」は「不可能」なのであり，何か本質的なものを有しているのではないのだ。ラクラウ・ムフは，社会とは「その部分的な諸過程を基礎づけている全体性」なのだとする理解を放棄している。そして，こうした徹底的に本質主義を否定する立場に固執するのは，全てのアイデンティティが不安定であり，最終的に固定できないということを言いたいがためである。「主体」というカテゴリーも最終的には，アイデンティファイできないのである。こうしたアイデンティティの流動性に新しい政治の戦略をみるのである。

ムフは，『政治的なるものの再興』において，ラディカル・デモクラシーとフェミニズムとの関係について言及する。そこでムフは，バトラーと同じ問いを立てる。すなわち，本質的なアイデンティティの脱構築のあとにフェミニズムの政治的行動は可能なのかと。無論，ムフの答えは「YES」である。反本質主義的なアプローチによってもフェミニズムは政治に参入することはできると言うのだ。ムフは言う。「ラディカル・デモクラシーの政治に関与するフェミニストにとっては，自由と平等という原理を適用すべきさまざまな社会関係を十分に理解するために，本質的なアイデンティティを解体することは必要条件でなければならない。」(Mouffe:1993＝1998:156) そして，アイデンティティというカテゴリーが根底から検討に付された結果あと，どういった政治的な可能性があるのかというバトラー問いに対して，ムフは言う。こうした政治の可能性は，「抑圧に対する種々の異なった闘争の節合を目的とする民主的政治に多大の機会を提供する」ことになり，「そこで生まれてくるものは，根源的かつ多元的な民主主義のプロジェクトの可能性」である。そして続けて言う。

> 「このようなフェミニズムのプロジェクトは，女性としての女性というアイデンティティについての本質主義的な理念と同様に，特定の厳格なフェミニズムの政治を基礎付けようという試みをも，放棄することを必要とする。フェミニズムの政治は，女性としての女性の利益を追求するような独自の政治形態としてではなく，むしろ諸要求のより広範な節合という文脈におけるフェミニズムの目標と目的の追求として，理解されなければならない。これらの目標や目的は，「女性」

というカテゴリーが従属を含意する仕方で構築されているような，一切の言説や習慣，社会関係の変革にあるものでなければならない。」(Mouffe:1993＝1998:175)

こうした言葉は，次のバトラーの言葉と共鳴する。

「…たしかに私の仕事には，規範的な方向があることは認めますが，けれどもそこには，規範的な基盤はまったくないと思うのです。実現可能な規範的方向を持つために，基盤を必要とするとは考えないのです。…ジェンダーが今後どうなっていくかを書かないで，今後のジェンダーの理想的な規範を示さないで，それ（ジェンダーを多様性のなかで捉えること；筆者注）を語りたいのです。私がやりたいことは，例えセックスの実践であろうと，ジェンダーの実践であろうと，ある種の実践を，異議申し立てを再節合の場として切り開いていくことです。…それが民主主義の文化に加担することだと思うのです。」(Butler:1994＝1996:62)

バトラーが懸命に言おうとしているのは，このことに他ならない。フェミニズムの基盤として，「女性」というアイデンティティは必要ないのである。そしていうまでもなく，戦略的な本質主義も必要ないのである。ラクラウ・ムフとバトラーは「女性」というシニフィアンが，すべての「女性」を表象することはできないし，このシニフィアンが偶有性に満ちたものであるということに関して一致している。そしてこの偶有性こそが政治的可能性，つまり政治的な（再）節合の可能性であるというところで一致する。

Agency，パフォーマティヴィティの問題に戻ろう。先に，パフォーマティヴィティは名付けたものを生産する機能を持つだけでなく，自らが生み出している意味を再定義する機能をも持っていると述べた。そしてそれを担うのがagency である。(だからといってヴォランタリーなものでは決してない。)「女性」というカテゴリーが実体としてあると見えるのは，慣習の引用があるからだった。そのとき「女性」という政治的シニフィアンがすべての「女性」を表象することはできないということは隠蔽されている。また別の「女性」の在り方もあったという可能性も隠されている。パフォーマティヴィティは，慣習の引用であり，構造の反復であった。バトラーは，構造の再生産という問題に対して，時間軸を挿入した。そうすることで，構造がズレていく可能性を描こうとする。このズレが起きるのは，例えば「女性」というシニフィアンとシニフィエには本来的なつながりが，無いからであり，だからこそ政治的シニフィアンが新しい意味へと開かれているのである。これが（再）節合の意味である。バトラーによれば，アイデンティティというシニフィアンの未来は，忠実に反復できないということにおいてのみ保証されている。その未来を保証するためには，誤用（catachresis）をすることが必要なのである。そしてバトラーが本質主義を徹底的に否定するのは，本質主義がこうしたシニフィアンとシニフィエの関係を固定化し，シニフィアンの再節合化の可能性を剥奪してしまうからだ。

バトラーが反本質主義を謳い，agency 理論を言うことで，これまで当然視されていた社会変革のためのヴォランタリズムを否定するのは，筆者が考えるに，上記の理由とはもう一つ別の理由があると考える。筆者は，その理由をネオ・リベラルに対するバトラーの警戒心からだと考える。

『触発する言葉』において，バトラーは「侮蔑発言」を取り上げる。そこにおいて最も重要な問題は，「国家」である。バトラーが国家に関心を寄せるのは，その暴力性ゆえにである。それゆえマッキノンに対する批判の要諦は，そこに関係している。マッキノンは，ポルノグラフィーを侮蔑発言として，国家による規制（検閲）を訴える。しかしこうした主張は，国家を中立的なものとしているがゆえに，国家の暴力的な部分を見逃してしまうのである。それに反ポルノ言説が簡単に保守主義へと絡め取られてしまうからである。

国家が作る「法」は，常になにかを創り出している。「禁止」することでなにかを創り出す。バトラーは，「検閲」という問題を取り上げる。検閲を取り上げる理由は，これが主体の構成と非常に密接に関係するからである。

バトラーは，検閲の機能を二つに分ける。すなわち，顕在的（explicit）検閲と潜在的（implicit）検閲との二つに。重要なのは，後者の方だ。潜在的検閲は，「語りえないこと（unspoken)」を規制してしまう権力行使形態である。言語使用を規制することの機能が一番有効に発揮されるのは，法的言説が意図しない，レトリカルな効果においてである。検閲は，発話可能な言説を制限すると同時に，その逆の側面に何かを造り出す。禁止すると同時に何かを創り出す。検閲は，規制するためだけにあるのではない。「語りえないもの」をも造り出す。バトラーによれば，検閲は産出的なものである。検閲は禁止によって，「語りえないこと」を作ると同時に，「語りえること」を作ることで，発話する（できる）主体を作り上げる。「主体は禁止それ自体の結果として現れるのである。」(Butler:1997:138）だから法によって侮蔑発言を規制しようとすることは，この主体の再生産の構造を逆に支えてしまうことにつながってしまうのである。そしてこうした規制の仕方は，発話者が発話の起源であるかのように捉えてしまっている。というのは，こうした法は，侮蔑発言をした本人をその発話の「犯人」（責任者）として捕らえて罰するからである。検閲は

再帰的に検閲制度を創り出している。だから国家に規制を求めるのは，自ら自分の首を締めるようなものなのだ。

そして現在リベラルな言説と規律権力の共謀が見られる。フェミニストが「女性」としての権利を国家に対して要求するというリベラルな言説は，「女性」という政治的アイデンティティを私的利益へと変化させてしまう。そしてそれと同時に，規律権力はそうした女性の利益を管理可能な規範化された社会的アイデンティティにしてしまうのである。つまり，「規律権力は，リベラルな個人化によって生み出された権利付与を政治的に自然化する。その一方で，リベラリズムは，規律的なアイデンティティによって生み出された権利の要求を政治的に自然化するのである。」(Brown:1995:59) ウェンディ・ブラウンは，マッキノンを批判していう。マッキノンのように，アイデンティティを法のなかに位置付けてしまうということは，「不可避的にアイデンィティを全体化し形式化することで，権利の効果を個人に帰属させてしまうのである。そうした法的な個人化を通し，さまざまな規制を生産するのである。」(ibid:133)

そうであるならば，国家の規制に反対して，「個人の絶対的な自由」という概念に回帰すればよいのだろうか。しかし国家の規制に対し，逆に「個人の自由」を持ち出すのは危険なのだ。いうまでもなく，近代国家は個人に自由を与え，そしてそれを彼ら自身で管理させることを通じてその支配を貫徹しているのである。「国家に規制を請求すること」と「個人の自由を建前として国家の規制に反対すること」は表裏一体をなしている。そしてこの規制に対する反対は，ネオ・リベラルの戦略に取りこまれている。ネオ・リベラルの戦略は，「個人の自由」の名の下に，一切の国家の介入を否定する。そして同じ理由で，不平等を正当化してしまう。というのは，社会的財を公平に配分することは，ネオ・リベラルにとっては，国家の介入を招いてしまうからである。それでは，国家権力は縮小したのだろうか。しかし，そうした「国家の退場」を巡る議論は，国家権力の拡大を隠蔽してしまう。権力は最も私的な領域において効果を発揮しているし，その領域で拡大しているのである。それゆえ，バトラーは，「個人の自由」を根拠として侮蔑発言という問題を解決しようとしない。

バトラーは，侮蔑発言の解消を「国家」にも「個人の自由」にも頼らない。それゆえ，agency という考えを持ち出してくるのである。パフォーマティヴィティとしての侮蔑発言に対して，同じくパフォーマティヴィティという手段で対抗すること。それが新しい未知の文脈を作り上げるというのだ。この「流用」の戦略が，国家による検閲に依らない，適当な戦略なのである。そしてそうした「流用」の戦略は，「個人の絶対的な自由という不可能な概念へ回帰することに抵抗する戦略でもある。」なぜならそれは，先に確認したように，agency は絶対的主体とは違うからだ。

> 「主体の agency というものは，主体の性質でも主体の固有の意志や自由でもなく，権力の効果である。だから主体の agency は，拘束されてはいるけれども，前もって決定されているものではない。主体が一連の禁止を通した発話において構築されるものならば，この基礎付け的で構成的に制限しているものは，主体の agency のための舞台を提供する。Agency は，そのような禁止を条件にして可能となるのである。これは，他人に対して道具的に権力を行使する絶対的（sovereign）主体の agency ではない。絶対的主体の後にくる agency として，その言説的作動は前もって枠付けられているが，さらに開かれた予期しえない境界へと開かれているのである。」(傍点筆者) (Butler:1997:139)

ここまで，agency 概念の持つ政治的意義を見てきた。まず，反本質主義に関して。フェミニズムにとって，反本質主義は運動を後退させるものではなかった。バトラーにとって，それはネガティヴではなくポジティヴに捉えられる。それは，言葉の意味に新しい定義を呼び込むからだ。そのときに agency が機能する。Agency によって，再節合が起こる。そしてそのことによって，それまでの社会的な価値秩序，社会のあり方に変化を差し込むのである。次に，国家に対する態度に関して。侮蔑発言という問題において，国家による権利の保護を求めることはできない。それは今ある構造を強化してしまうことにつながるからだ。だからといって「個人の自由」へと回帰することもできない。それはネオ・リベラルに取り込まれてしまうからだ。国家にも頼れない，個人の自由にも帰れない，この袋小路を脱するためには，agency が必要なのである。Agency こそが，国家による権利の保護や個人の自由に還元してしまうということなく，侮蔑発言そのものを変えていくことができるのだ。

6．おわりに　－「理論と実践」に関して

この論文は，バトラーの agency 概念を「構造と行為」という社会学的な問題意識からはじめ，そしてラディカル・デモクラシーの文脈においてその概念を検討してきた。最後に少しだけコメントをするならば，まずバトラーの議論は，言語論・精神分析に偏り過ぎているためか，唯物論的な視点が全くといっていいほど欠けているということである。社会はたしかに言語の使用が重なり合い続けることで成り立っているといえるかもしれないが，同様に物質的なものによっても規定されている。「女性差別」「ホモフォビ

ア」「人種主義」といった問題はそうしたもの抜きで考えられるのだろうか。またバトラーは，「男」「女」という生物学的差異がどういった条件の下で，規範として働いてしまうのかを問う。パフォーマティヴィティとは既にある慣習の引用であると述べた。そして，その慣習のなかに歴史性が沈殿し権力の痕跡を残しているという。そうした規範の反復によって，例えば「男」「女」という差異が社会的に意味付けされるのだった。しかし，そうした説明では，「なぜそもそも，そうした規範ができあがったのか」ということは説明できないのではないか。

バトラーの agency は，「構造と行為」という社会学的な問題にそぐわないと思うかもしれない。というのは，構造というものを非常にフレキシブルのものとして捉えすぎているし，そして行為者の意図，意志を排除しているからだ。そうした意味においては，説明概念として不適当かもしれない。しかしそう思う人は，「何のための理論か？」ということを考えて欲しい。筆者が敢えて，ラディカル・デモクラシーの文脈にバトラーを置いたのは，このことを考えたかったためである。そうでないと，agency 概念を理解することの意義が半減されてしまう，というかほとんど意味がなくなってしまう。バトラーがフェミニストであることを繰り返し強調したのもこのためである。バトラーはなぜ agency 概念を必要としたのだろうか。それは，社会的現実を説明するためだけではない。説明するとともに，社会的現実を変えるためでもある。しかし，これに対して，それはナイーブな政治主義として一笑に付されるのだろうか。しかしこうした批判は問題外である。「再帰性」の議論を待つまでもなく，社会科学に限らず科学一般の知識は社会に反映され，社会を変容させる側面を持っているのである。そうしたことに無頓着な批判は相手にしない。

ブルデューは社会理論と社会的現実との再帰的関係を，自らの理論の中に組み込んでいる。ブルデューにとって，社会における闘争とは，象徴闘争であり，それは言葉を巡る闘争である。客観的な社会的現実は存在しない。社会は言葉（知識）を媒介としてあるのだ。社会に起こる闘争は，ある社会的な区分・分類（例えば階級，人種など）が客観的に存在するようにさせ，主観的にもそう知覚させる，そういった物質的・認識的正統性を巡る争いである。そこでは，社会のなかで社会に関する知識を創り出す科学の果す役割は大きい。なぜなら象徴闘争の場に権威を持って登場できるからだ。そして科学的知識は社会的現実の一部を既に成しているし，同じ知識が現実を変えてしまう。社会的世界に関して権威ある言葉を持つ社会学は，なにかを言ったと同時に何かを創り出してしまうパフォーマティヴなものなのである。それゆえブルデューは，社会学が使用する言葉（知識）に対して，つまり社会学と言葉の関係に注意を払う。そして社会学という実践にある種の倫理を求める。社会学者の任務は，言葉をめぐる闘争の論理，闘争の空間を記述することである，と。つまり，その空間において賭けられているもの，そこに働いている様々な経済資本・社会資本・文化資本の力学を記述することが社会学の任務だというのだ。そしてその時，その任務において産出された言葉が現実的効果を発揮することを忘れてはならないのである。そういった倫理に基づいた「社会的機構についての科学」は，当の社会機構を正統化してしまうものでもなく，逆に積極的に政策に介入することに陥ることもしない。この「科学」は記述する当の現実の蓋然性を示すが，それは起こりえただろうことがどのような条件で起きなくなってしまったのかということに関する法則を科学的に説明する。そしてこの「科学」は，このことを基礎として，偶有的なもの（現実としてある動かしがたい当たり前と思われていること）を拒否するためのチャンスを提供するものなのだ。(Bourdieu:1982＝1993, 1987＝1991)

バトラーとブルデューは，社会的現実の偶有性を捉えること，つまり当たり前のことを当たり前のものとして捉えないということにおいては一致している。だた自らの理論を社会的世界においてどう捉えるかにおいて，決定的に異なっている。ブルデューは，科学の社会におけるポジションにたしいて注意深い。そのため，社会学者に倫理を求める。ブルデューの目には，社会構造の変革をプログラミングするバトラーの振る舞いは「意志的介入主義」としか映らないだろう。

こうした意味での「理論と実践」について言及しておこう。近年盛んになりつつあるレズビアン・スタディーズやゲイ・スタディーズ(8)が問うのは，こうした学問の「知識」の生産であり，その流通過程なのである。そして，純粋で中立的な知とホモフォビア社会との相捕性である。そして，理論自体が客観的で普遍的であるというフィクションである。レズビアン／ゲイ・スタディーズにおいては，理論は重要な意味を持つ。例えば，社会構築主義という問題に関していうと，それが持っている社会的な意義というのは，アイデンティティというものが構築されたものだということによって，負のアイデンティティが緩和されることにある。しかし逆にそれが空虚なイデオロギーとしてしか社会に存在し得なくなるという可能性もあるのだ。すべてのアイデンティティはフィクションであるという認識が，逆にマイノリティの存在そのものを否定することにつなげられたりする。ゲイの活動家が本質主義といって単純に批判され，それと同時にゲイに対する差別が隠蔽されてしまう可能性があるのだ。だからレズビアン／ゲイ・スタディーズにとって，理論が完璧になることはありえない。理論は可謬的なものなのであり，そしてその有効性は現実

との関係において常に試されている，というより試され続けなければならないのである。

筆者がバトラーの agency を取り上げることで言いたかったことは，ともすれば「記述理論」に流れがちな社会学のなかで忘れ去られてしまい，客観的記述の名の下に，排除されそうな「規範理論」の部分を真正面から語ってみようということだ。だからこの agency 概念が社会学的に意義があるとするなら，行為概念の転換ということよりも，行為概念を転換させることで「規範理論」へと結びつけたことにある。それは，ハーバーマスの言う了解を志向する「コミュニケーション的行為」と対比できるかもしれない。しかし，バトラーの戦略は規範的な基盤を作らないのである。そうしたものを作らずに政治的な節合の実践を行おうとしているのである。それは非常にアド・ホックな戦略といえる。そういった新しい「批判理論」を創り出したということがバトラーの意義である。

最後に，バトラーの戦略がどこまで実現可能なのかという問題が残っている。しかしそれは「理論と実践」という社会学にとって永遠のテーマであり，筆者も答えに窮する問いであるが，ただそれは現実の判断を待つより他ないだろうとだけ言っておこう。

注

（1）Agencyは非常に訳しにくい概念である。例えば，バトラーの訳者である竹村和子は，「行為体」，文脈によって「行為」「行為性」と訳し分けている。本論文はこの概念を中心に扱うのでそのまま英語表記とした。

（2）他にagencyを論じているエッセイは，本橋（1999），竹村（1997），Grossberg（1996），Spivak(1996)がある。

（3）しかし，オースティンは，発話者の意図や誠実性を遂行的行為には不可欠としている。この点に関しては，後に述べる。

（4）バトラーは言うまでもなく，現在最も有名なクイア研究者であり，ゲイ・アンド・レズビアン研究者である。しかし，そうであるまえに，フェミニズムの理論家だと言っている。Butler（1994＝1996）参照。

（5）ブルデューも構造分析に時間という要素を取り入れる。ただしそれは，客観主義的視点と主観主義的視点という二つの視点を統合するために用いられる。

（6）この点は，ラカンの象徴界の捉え方の違いでもある。バトラーがラカン派の象徴界を批判して言うには，ラカン派が，象徴秩序の〈つねに－すでに－そこにある〉という性格をあまりにも固定したものとして語りすぎているというのである。バトラーによれば，象徴界は繰り返して生産されるもの，再生産されるもの，そして脱線してしまう可能性があるものである。（Butler:1994＝1996）

（7）ジジェクとバトラーが決定的に異なるのは，パフォーマティヴィティに関してである。バトラーは，ジジェクがパフォーマティヴィティを象徴界の超越的な〈法〉に還元してしまったことの結果，そこにある社会関係によって生み出される非連続性，そして歴史性を見逃していると批判するのである。（Butler:1993, Chap. 7）バトラーとジジェクとの「現実界」理解の違いについては，竹村（1996）を参照せよ。

（8）ゲイ・スタディーズ，レズビアン・スタディーズに関しては，ヴィンセント・風間・河口（1997），現代思想『総特集・レズビアン／ゲイ・スタディーズ』（1997，Vol. 25-6）を参照。本論文では，バトラーをゲイ・スタディーズ，レズビアン・スタディーズというコンテクストの上では論じていない。本来はそうしたコンテクストで語るべきと思う。今後の課題としたい。またこうした意味では，バトラーを社会学という制度化されたものの議論に載せることで，バトラーの議論を収奪（expropriate）していることになるかもしれない。そうした批判は免れ得ないだろう。ただ一つ言わせてもらうと，筆者は，ゲイ・スタディーズ，レズビアン・スタディーズが常に意識している「理論と実践」を，バトラーのagencyを議論することで，社会学とそうしたスタディーズ研究がリンクする新しいポイントを示したかった。その意図が達せられたかどうかは読者に委ねたい。

参考文献

Austin, J, L 1962 "How to Do Things With Words", Oxford University Press（＝1978『言葉と行為』坂本百大訳，大修書店）

Bourdieu, P 1982 "Ce Que Parler Veut Dire —L'économie des échanges linguistiques", Paris, Fayard（＝1993『話すということ—言語交換のエコノミー』稲賀訳　藤原書店）

1987 "Chose dites", Paris, Ed. de Minuit（＝1991『構造と実践』石崎訳　藤原書店）

Bourdieu, P and Wacquant, Loic J, D 1992 "An Invitation to Reflexive Sociology", The Chicago University Press

Brown, W 1995 "State of Injury: Power and Freedom in Late Modernity", Princeton University Press

Butler, J 1990 "Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity", Routledge（＝1999『ジェンダー・トラブル』竹村和子訳，青土社）

1993 "Bodies That Matter: On the Discursive Limits of "Sex"", Routledge·

1994 'Gender as performance: An Interview with Judith Butler', "Radical Philosophy67", Summer（＝1996「パフォーマンスとしてのジェンダー」竹村和子訳，『批評空間』Ⅱ-8）

1997 "Excitable Speech: A Politics of the Performative", Routledge

（＝1998「触発する言葉」竹村和子訳『思想』no. 892，岩波書店）（部分訳）

1997 "The Pyschic Life of Power: Theories in Subjection", Routledge

Derrida, J 1967 "L'écriture et La Différence" Edition du Seuil（＝1983『エクリチュールと差異』（下）梶谷・野村他訳，法政大学出版局）

1988 'Signature Event Context' in "Limited Inc"., tr Weber, S and Mehlman, ed Graff, G, Evanston: Northwestern University Press

土場学　1999　『ポスト・ジェンダーの社会理論』青弓社

Felman, S 1980 "Le Scandale du corps parlant", Editions du Seuil（＝1991『語る身体のスキャンダル』立川健二訳，頸草書房）

Grossberg 1996 'History, politics and postmodernism: Stuart Hall

and cultural studies', "Stuart Hall" ed. Morley, D. Chen, K, Routledge

Laclau, E/Mouffe, C 1985 "Hegemony and Socialist Strategy: Toward a Radical Democratic Politics", Verso (=1992『ポスト・マルクス主義と政治—根源的民主主義のために』山崎・石澤訳，大村書店)

Mouffe, C 1993 "The Return of the Political", Verso (=1998『政治的なるものの再興』千葉真也訳，日本評論社)

本橋哲也 1999 「応答するエイジェンシー」『現代思想』1999-6，青土社

Spivak, G 1996 'Subaltern Talk: Interview with the Editors', "The Spivak Reader" ed. Landry, D. Maclean, G, Routledge

高橋哲哉 1998 『デリダ —脱構築』講談社

竹村和子 1996「〈現実界〉は非歴史的に性化されているか？ —フェミニズムとジジェク」『現代思想』1996-12，青土社

竹村和子 1997「責任あるエイジェンシー —ポストモダニズム，ポストコロニアリズム，フェミニズム」『差異と同一化 —ポストコロニアル文学論』山形和美編，研究社出版

上野千鶴子+竹村和子 1999 「ジェンダー・トラブル」『現代思想』1999-1，青土社

ヴィンセント，キース／風間孝／河口和也 1997 『ゲイ・スタディーズ』青土社